

内藤湖南の見た中国

中国はどこへ行くのだろうか

かすや かずき
粕谷一希
(評論家・編集者)

生いたちの特殊性

湖南内藤虎次郎は慶応2年(1866)、旧南部藩領、陸中鹿角郡毛馬内(現・秋田県鹿角市十和田毛馬内)に生まれた。父は士族の内藤調一(号十湾)、母は容子、次男の生まれである。

明治維新の前年、名前の虎次郎は吉田松陰の寅次郎にあやかったという。吉田松陰は東北遊歴をしたこともあるが、安政の大獄で死んだ尊皇攘夷のシンボル、東北でもその名は鳴りひびいていたのであろう。号の湖南は十和田湖の南の意、ちなみに父の号十湾も、曲りくねって入江の多い十和田湖を形容したものである。

父十湾は小禄ながら藩儒として南部藩家老桜井氏に仕え、母方の実家も儒家であったから、湖南は学校にあがる前に、家学としての儒学を叩きこまれたことになる。5歳のときに母を失うが、その年『二十四孝』を読んでいる。8歳のとき兄文蔵が死に、継母みよを迎える。

維新によって禄を失った内藤家は貧困を極めたであろう。家庭的な不幸がつづくのも、貧困と無関係ではあるまい。また虎次郎は実母容子への思慕がつよく、継母との折り合いがよくなかったらしい。のち、虎次郎が東京へ無断で出奔する

ことになったのも、継母が自分の連れ子と妻せようとしたためらしい。

12歳のとき、父から頼山陽『日本外史』を教わる。16歳のとき、明治天皇が東北を行幸された際、生徒を代表して漢文の奉迎文をつくる。

明治16年(1883)、18歳のとき、秋田師範学校入学、編入試験を受けて高等師範科に転科。課外に英語を学ぶ。20歳で高等師範科を卒業、北秋田郡綴子小学校の主席訓導となり、校長の業務を行なう。宝勝寺住職、綴子村神道家と交わり、仏教と国学に関心をもつ。

明治20年、綴子小学校を辞職、両親に無断で上京する。湖南の文才を認めた前校長・関藤成緒の紹介で、仏教ジャーナリスト大内青巒を頼り、仏教雑誌『明教新誌』の記者となる。

貧困のなかで、湖南の読書好き、好學心、文才は周囲を驚かせ認めさせたのであろう。彼はすべての機会と交友を巧みに捉え、それを活用して自分の可能性に挑戦していつている。その細心さと大胆さ、判断の正確さは終生、湖南の人生の特徴である。

この時期にも湖南は英語の個人教授を受けている。おそらく湖南の英語力は人並み優れたものだったと推察される。

この大内青巒の下にいたころから、湖南は明治20年代の思想界の巨匠たち、国民主義の人々、すなわち志賀重昂、三宅雪嶺、杉浦重剛などからその文才を評価されるようになっていた。やがて3人の主催していた政教社に入り、『亜細亜』の編集にあたる。

明治26年、28歳のとき、同じ国民主義の論客で官僚であった高橋健三が大阪朝日新聞の客員(実は主筆)として朝日に入社したとき、私設秘書として朝日に入社。病弱な高橋を助

けて論説の執筆にあたった。

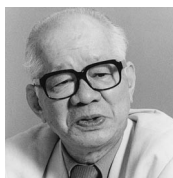
日清戦争がおこるや、高橋の秘書として大本営のあった広島に随行。明治29年、朝日新聞に「関西文運論」（のち『近世文学史論』と改題、単行本化）を連載。同郷の田口多作の娘郁子と結婚。このころ正岡子規と交わる。また新妻の郁子を三宅雪嶺夫人の下に行儀見習いに通わせている。郁子は18歳、13歳年下だっただけに、半ば父親代わりの気分もあったのだろうか、早く母を失い、温かい家庭環境に餓えていた湖南の心情を推測するとほほえましい。

翌年、湖南は『近世文学史編』『諸葛武侯』という、日本と中国相手に関する著書を公刊し、文名大いにあがったという。メディアも制度的には整備されていなかったが、文章によつて世に立つ態度が本人にもあり、世間もまた文章力によつて評価していたことは、貴重なことである。

以後、湖南は『台湾日報』主筆として台湾に赴き、乃木総督を手きびしく批判しているのは注目に値する。児玉源太郎総督、後藤新平民生局長官とはすれちがいったようである。東京に戻つて黒岩涙香の『万朝報』の論説記者となり、内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦（号枯川）などと同僚となった。このころ、湖南が私淑した高橋健三が病没、湖南は師を失うと同時に師から解放されたことになる。湖南は妻を伴つて祖父の50回忌に帰郷。人生ひと区切り、来し方、行末を想いめぐらしたのである。

書痴と社交性

ここまでは湖南の人生の前史といつてよい。修業時代、遍歴時代であり、支那学の内藤湖南と直接関わりはない。しかし、あまりに特異な経歴なので簡単に略歴を述べた。



かすや かずき ● ジャパンジャーナル社長。東京大学法学部卒。1955年中央公論社入社、67年『中央公論』編集長を務め、78年退社。以降、評論家として活躍。86年『東京人』創刊とともに編集長。『外交フォーラム』編集長も務めた。近著に『反時代的思索者』『鎮魂吉田満とその時代』など
撮影：高木厚子

前史時代にいえることは、家学の素養はあったが、師範学校だけで大学を出ていない湖南は、その部分を書痴という独特の方法で補った。鋭い感性と論理によつて、独りで書物についての勘を養い、手探りで歴史の世界にわけ入り、またマニアックなほど書物を買ひあさつた。彼の下宿は、一度火事で一切を失いながらも、つねに本で埋まっていたという。貧乏しながらでもマニアは本を買う金だけは不思議に出てくるものなのである。

もう一つは、彼は学歴不足の書痴でありながら、内向的にならず、鬱病にもならず、きわめて社交的であり、下宿にはつねに友人・仲間が集まって梁山泊を成していたという。この性癖は老境になつても変わらず、未完の書物を完成させるはずであつた京都郊外の隠居生活も、来客大歓迎で、多くの著述が未完のまま、長男の内藤乾吉氏に委ねられることになつたのである。

偉大なる旅行者

明治32年、湖南は初めての中国旅行に旅立つ。彼は生涯に8回の中国行を実践しているが、それはきわめて冒険に富む、危険な単独行が多かつた。彼は徒歩で、馬車で、船や汽車を乗り継ぎ、丹念な彼自身の大陸地図を完成させていった。

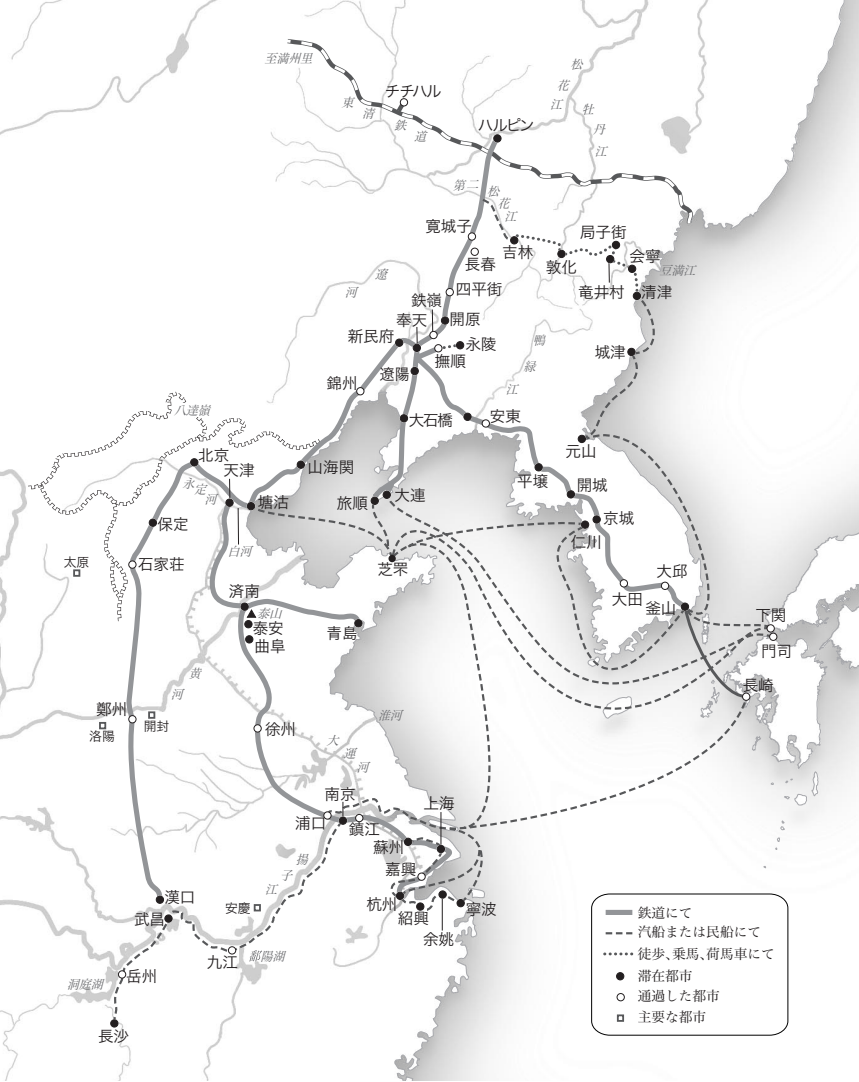
ただ湖南の旅は、河や山、都会や農村といったものの観察に止まらず、最大の目的は中国の代表的な知識人と面談し、筆談によつて意見を交換することにあつた。高杉晋作の場合もそうであつたが、会話はできなくても筆談によつて、中国知識人と対等な対話と相互理解に到達することができたのである。

厳復 フアンルオ
方若 ウェンティンシ
文廷式 チンウエンシ
張元済 チンゲンシ
羅振玉 ルオヂンユイ

であった。巖復はヨーロッパ思想に精通した西欧派知識人であり、のち、アメリカのベンジャミン・シウウォルツが『中国の近代化と知識人』（東大出版会、平野健一郎訳）の中で研究対象とした人物である。また、羅振玉は、清朝が滅亡したとき、日本に亡命し、京都に滞在して自らの考古学研究を完成させた存在で、湖南や狩野君山など京大支那学の人々が亡命生活を何くれとなく世話したのであった。

「偉大なる歴史家は偉大なる旅行者である」という格言にしたがえば、内藤湖南はその有資格者であり、単なる書齋人である。

内藤湖南が訪れた中国。東北部から揚子江沿岸の内陸部まで及んでいる。1899年から1917年にかけて、8回にわたって中国を訪れたが、そのうち記録のあるもので旅程を作成した。次数は示していない。地名は当時のもの



言論人としての発言

はなく、現代の人類学者に通ずるフィールド・ワークの実践者であり、同時に現地での知識人との対話を通して、国籍を越え、ヨーロッパのシノロギーの水準とも、中国の知識人も比肩できる水準の学殖をもつことのできた人のひとりとなることができたのである。

明治30年代、内藤湖南はつぶさに東北から、北支、中支にかけての状況を観て、ロシアのシベリアを経由しての南下政策の圧力をヒシヒシと感じとり、言論人として対露主戦論者のひとりとして論陣を張ることになる。東京朝日の主筆池辺三山も対露強硬論者であり、東大の七博士（法科大学教授の戸水寛人、小野塚喜平次、富井政章ら）だけではなかったのである。

ただ、その当時は後年、ロシアに代って日本自身が南満州鉄道の経営、ひいては満州地域の植民地化に乗り出すことになるとは湖南自身も対露強硬派の人々も考えていなかったことである。

湖南は中国の知識人との筆談で北京からの遷都の必要を説いているが、その理由は土地が痩せてしまっていることと同時に、ロシアの南下の危険に対抗するために首都をもっと肥沃な南方に移した方がよいとの判断を述べたのであった（日本の名著『内藤湖南』小川環樹編著、中央公論社）。

言論人内藤湖南は明治30年代、中国旅行ののち、朝日新聞社に復帰していた。明治35年、日本は日英同盟を締結するが、それも極東における英露の角逐が一段とはげしくなり、英国は日本を自らの代理として格好の相手と考え、日英の利益が一致したためである。

朝日新聞社も、当時の大陸の緊迫した情勢に対処するため、大陸通の漢学派の内藤湖南のような存在を必要としたのであった。湖南だけではない。ロシア通、ロシア文学の二葉亭四迷もまた朝日新聞記者となつてゐる。当時の朝日はある時期、短期間であるが、仏学の池辺三山、英学の夏目漱石と合せ、英、仏、露、漢の四人の外国通が揃つてゐた。言論機関としての朝日新聞社が、今日に至るまでナンバーワンの位置を保つてゐるのは、このころの余慶に頼つてゐると考えるべきかもしれない。

東洋史学研究者への登用

日露戦争後、日本は勝利の余勢を駆つて、極東の列強のひとつとしての帝国としての国家体制、社会体制の整備にかかつてゐる。京都帝国大学の創設もそのひとつであつた。

文科大学学長の狩野亨吉は、君山狩野直喜や桑原隲藏などに創設の準備をさせると同時に、民間の才幹として幸田露伴と内藤湖南を史学科東洋史に迎え入れることを考えたのである。これは大胆な人事であつたが、同時に卓越した洞察力をもつた人事であつたといえる。狩野亨吉は、露伴・湖南の實力を評価すると同時に、大学の学者たちの虚飾に満ちたつまらなさも見抜いてゐたように思う。「孔子さまでも学歴のない者を教授にするわけにいかない」と頑張る文部官僚を相手に、自己の主張を通したのであつた。

江戸っ子の露伴は1年で東京に帰つてしまつた。窮屈さ、肩苦しさに閉口したのである。しかし、東北の田舎者、苦勞人の内藤湖南は大学内の偏見に耐え、徐々に自分の實力を同僚や学生たちに認めさせていったのであつた。

京大の創設は政治の都東京でその影響を受けやすい東京帝国大学に対して、学問の自立と長い歴史的視野に立つた学風を育てたいという西園寺公望らの意向に基づいてゐたという。そしてそのねらいは当たつたといえよう。東大が今日に至るまで官僚養成機関の趣きを呈しているのに対し、京大は自由で独創的な学者を輩出してきたのである。

内藤史学の学風

湖南の講義はすべて、小さなメモを書いた紙片だけを頼りに、理路整然、流れるように語り来り、語り去つたという。だから、湖南自身にはノートはなかつた。講義録を基礎に著作化するときには聴講した学生たちのなかから、正確なものを借りてそれに朱筆を加えていったという。

喋ることがそのまま文章になつたということは、驚くべき明晰さである。さらにその文章が起承転結を構成する歴史叙述となつたということは、頭脳の明晰さの奥行きと拡がりが見像を越えたものだったということだろう。

湖南の学問は文明の發生に始まり、古代、中世、近世、最期、そして近現代の清朝衰亡史に至る。それぞれの時代に、歴代王朝の特徴を微細な点まで押え、登場人物の個性を正確に掴み、歴代王朝の財政・軍事・思想を数字を挙げて克明に叙述してゐる。その記憶力は恐るべきものだが、それは暗記力というより、歴史の流れを簡明に掴む術を完全に会得してゐたのであろう。

また古典の分析、批判的解釈につけて、清朝の考証学を十分理解してただけでなく、ヨーロッパのギリシア古典研究、聖書学の方法について、同僚の西洋史の研究者を根掘り葉掘

り質問攻めにしていったというから、その学問の方法は十分現代的であったのである。

また、名著として最近復刻された『支那絵画史』（ちくま学芸文庫）は、清朝の滅亡に際会して、清朝の名望貴族の家から、国宝級の絵画、美術品が流出し、日本にも多くの美術品が流入した。湖南はその現物の多くを実際に手に取り、鑑定家として目利きの役割を果たし、高価なものは、朝日新聞社長の上野家をはじめ財閥に買わせるブローカーの役割も果たしたことが、湖南の支那絵画開眼に大いに役立ったらしい。湖南も狩野亨吉も学者であると同時に、古書、古物の鑑定家の一面をもっていた。そうした確かな眼が『支那絵画史』を成立せしめたのであろう。

また、『全集』第12巻は目録学に就いて述べられている。支那の古書の分類学であるが、単なる分類学ではなく、支那の学問を理解する最奥のものが、この目録学の中に存在していることを示唆している。恐るべき学殖といえよう。

湖南の学問の全貌を知る者は、中国人、ヨーロッパ人、日本人の別なく、深々と頭を下げる呈のものである。今日ではその漢語的表現のため、若い世代には取っつきにくい、そこを越えれば、推理小説のような面白さを味わえる世界なのである。

ジャーナリズムとアカデミズム

本来ジャーナリズムとアカデミズムは、相反するものではなく、人間の営みの裏表である。湖南は京大教授となったのちも、時局論をやめなかった。当時通俗大学と称した市民大



大正2年（1913）に公刊された『支那論』で湖南は、2年前に勃発した辛亥革命をふまえ、急転する時局を論じ、中国の今後の進路に関する自説を展開した。写真は『支那論』の復刻版

学にも、積極的に参加して、市民に直接語りかけた。大正2年『支那論』を公刊し、大正13年『新支那論』を公刊して、清朝滅亡以後、辛亥革命とそののちの混乱について、丹念に追いつづけ、「かつて列強は協同して支那に対したが、次第に諸国が脱落して、日本と支那の正面衝突になるかもしれない」、と8年後の満州事変を予見するような意見を述べている。

内藤湖南や津田左右吉は、五四運動以降の新しいナショナルリズムへの理解がなかったとは、新しい世代から言われた批判である。たしかに、湖南は中国に共産主義政権が実現するとは思っていなかった。

しかし、人民中国に期待した新世代の知識人は、事態の新しいさに目を奪われて、中国の変わらざる側面を見落していたように思う。人民中国もまた理想郷ではなく地上の国であり、官僚制の腐敗や農民の反乱など、古来からの中国の姿を見失っていたのであり、革命中国は、60年にして、伝統的な中国に戻りつつある。

そうしたなかで、内藤湖南・宮崎市定によって唱えられ展開された宋近世説という時代区分論は、中国は内在的發展として近代化するという仮説につながっているように思う。

ふたたび中国の停滞説、分裂と割拠が専制かの二つしかないという仮説に対し、内藤・宮崎という巨匠は、中国人の能力を信じ、中国人以上に中国的な見方を貫いた存在だったことを、日本と中国の若い世代は理解する必要があるし、われわれもまた、中国が真に、国際社会のメンバーとして責任ある行動を取ることを願ってやまない。そのための、より自由な政治の仕組みを創設することを。